

震災と原発事故の 記録と記憶の 伝承に向けて

UCHIBORI Masao



福島県

内堀雅雄

知事

2011年の東日本大震災発災直後より、長崎大学からは、多くの医療関係者、研究者の方々に派遣いただき、言葉では言い表せないほどの御支援を頂いております。

山下俊一先生、高村昇先生におかれましては、これまでも本県における放射線健康リスク管理アドバイザーとして放射線に関する県民の理解を深め、正確な情報を提供いただいている上、高村昇先生

においては、川内村、富岡町、大熊町の住民帰還に向けた研究及び医療支援活動等に精力的に取り組んでおられるところ、東日本大震災・原子力災害伝承館の館長をお引き受けいただき、心から感謝を申し上げます。

震災と原発事故から10年となる節目の年を迎えました。

昨年は、帰還困難区域の一部で避難指示が解除されたほか、東日本大震災・原子力災害伝承館等の新たな拠点施設の完成など、福島県の復興は着実に前へと進んでおります。

伝承館は、東日本大震災と原子力災害という未曾有の複合災害の記録と記憶を後世に伝えるとともに、復興に向かって懸命に歩みを進める福島を国内外に発信していく大切な役割を担う施設であり、9月の開館以来、県内外の学校による教育旅行など多くの方々に来館いただいております。また、当館は、震災によって大きなダメージを受けた地域の新たな産業基盤の構築を目指す、福島イノベーション・コースト構想の情報発信拠点としての役割も果たします。

今後は、展示内容や研修事業の充実のほか、福島の経験や記録を教訓として体系化し、正確な情報を発信するとともに、復興や防災を担う人材の育成を図るため、引き続き長崎大学との御縁、連携を大切にしながら、進化し続ける伝承館となるよう取り組んでまいります。

FUKUSHIMA
Prefecture

エールを 送り合った10年

TAUE Tomihisa



長崎市

田上富久

市長

昨年人気を博した朝ドラ「エール」中でも、名曲「長崎の鐘」誕生の部分は、とても感動的でした。実話そのものではないとわかっていても、永井隆博士と古関裕而先生の間には、あのような深い交流があったとしても不思議ではない気がします。

その「長崎の鐘」の歌詞に「慰め、励まし」という一節があります。短調から長調に変わる印象的な部分の歌詞です。

実は、この10年間の福島の皆さんとのお付き合いの中で、私が学んだことの一つは「お互いさま」ということでした。私は毎年、「長崎平和宣言」の中で福島にエールを送り続けてきました。でも、福島の皆さんを長崎が一方的に応援してきたのではありません。たとえば、福島県内のいくつかの市に派遣した長崎市の職員たちは、福島の人たちのやさしさや強さを学び、地方自治の原点を教してもらいました。福島から毎年、長崎に来てくれた子どもたちは、未来をつくることは人をつくることだと教えてくれました。

福島県への職員の派遣は今年度で終了します。でも派遣した職員たちは福島への思いを持ち続けています。この10年の間に、市民同士の交流もいくつも生まれました。

長崎大学の皆さんと同じ思いを持って、これからも福島の皆さんと“親戚付き合い”を続けていきたいと思っています。お互いさまの気持ちを忘れずに。



田上市長(中央後方)と、
「復興子ども教室」で長崎を訪れた川内村の児童たち

NAGASAKI
City